生命（いのち）果てる日まで

ガンと闘い演劇に燃えつきた夫へ

金森美弥子

果てる日まで

ガンと闘い演劇に燃えつきた夫へ

金森美弥子

講談社

生命(いのち)果てる日まで　定価八四〇円

昭和五十六年三月二十九日　第一刷発行

著　者　金森美弥子

© Miyako Kanamori 1981, Printed in Japan

装幀・レイアウト　井上正篤

発行者　野間惟道

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三一三　郵便番号一二三

電話　東京〇三一九四五一一一一(大代表)　振替東京八一五九三〇

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本はおとりかえします

0036-458616-2253（0）　(学2)

生命(いのち)果てる日まで

目次

第Ⅰ部　ガン死の男と十一人の友の323日　「週刊現代」編集部編　5

第一章　ガン宣告……6
下手な芝居／6
おかゆが食べたい／14
涙の交替制／25
十一人の戦友／30

第二章　ユースフルライフ……37
極秘作戦と役割／37
Tプロジェクト／43
限りなくガンを疑う／51
ガン細胞の転移／59

第三章　カーテン・コール……64
ガンと巨人／64
結婚記念日／69
鬼気迫る……／75

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「深い湖」／83

第四章　燃えつきる日まで……88
最後の夏休み／88
美しい「柩」／96
全身転移／101
「仕事ができない」／106
生きた日々に悔いはない／111

第Ⅲ部　生命（いのち）果てる日まで　金森美弥子　119

第一章　ある日、ガンの影が……120
結婚物語／120
ひたすらに楽しい日々／127
生き急いだあの人／135
最初のシグナル／141
何で自分の夫だけが……／148

第二章　残された日々のはじまり……159
普通の夫婦として／159

最後のお正月／164
おいしい料理と精一杯のおしゃれ／172
眠られない夜／179
ハワイでのやすらぎ／188

第三章　この生命誰のもの……194
彼の望むように／194
燃えさかる仕事への情熱／203
希望は消えず／207
「かもめ」の初日／214
悲しい偶然／218

終　章　命を燃やした愛ある人生……223
坂道をころげ落ちるように／223
生命のきわみの情景／227
燃えつきた人／234

あとがき／241

第Ⅰ部　ガン死の男と十一人の友の323日

「週刊現代」
編集部編

第一章　ガン宣告

下手な芝居

昭和五十四年十二月二十日、東京・虎の門病院一階待合室の公衆電話の前で、一人の女性が激しく泣いていたのを、金森美弥子（33歳＝当時）は覚えている。黒のブレザーに千鳥格子のズボンをはき、二階の血液検査室からニコニコ笑いながら下りてきた夫の馨（46歳＝同）は、その女性の姿に気付いてあわてて笑顔を消し、小声で、

「かわいそうに。あんなに泣かねばならないような何かがあったんだね」

といった。

そのとき美弥子自身の視界が暗くなりかかっていた。夫が、真っ暗な空から下りてきたように見える。女性は電話に向かって声を放って泣くだけで、何を訴えているのか聞き取れない。

美弥子はからくも気持ちを立て直し、

「そうね。世の中にはかわいそうな人がいるのよ」

と答えた。答えてから自分たち夫婦の関係は今変わったのだと思う。病院についてきた自分の父親の野副直行（59歳＝同）はしきりに、

「とにかくまあよかった。ガンじゃあなかったんだから」

と繰り返している。美弥子は美弥子で、

「ほんと。ただの胃潰瘍なんですって」

と言葉を返しながら、

〈私たち、なんて下手な芝居を……〉

と苛立つ。この妻は、夫に嘘をついている。もっとも重大な、何をおいても夫に相談したい大変な問題を、相談できない妻になってしまった――美弥子はそう思った……。

劇団四季の二十五周年（昭和五十三年）記念誌「聞き書き《四季》の二十五年」（構成・浜畑賢吉、文・鈴木利直）には次のような一節がある。

「《四季》には、十数年前から医務委員制度があり、劇団員の健康管理に気を配ってきた。本来、俳優とは自己による厳重な健康管理が要求される職業であるが《四季》は劇団員の健康問題に早くから着目していたのだ。一九七二年、ヤクルト名作劇場〈星からきた少女〉に出演中

の石橋岳美が白血病におかされ、間もなく世を去るという痛ましいできごとがあった。今日、年間ステージ数（特にミュージカル）が急速に増加したこと、劇団員の年齢が次第に高くなっていくことなどあって〝個人のためにも集団のためにも〟病気と事故を未然に防ごうとする意識が徹底してきている。現在《四季》と直接かかわりを持つ病院数は、日比谷病院を含めて全国二十一（内科五、外科四、歯科三、耳鼻咽喉科二、神経科三、小児科三、婦人科一）の多きを数え、多くの優秀な医師が友人としてかげから四季を支えている……」

「劇団・四季」と呼ばれているこの演劇グループは、ふたつの組織から成り立っている。

ひとつは浅利慶太を社長とする四季株式会社であり、制作、営業など演劇活動にともなう経済面の仕事を受け持つ。もうひとつは、芸術団体、劇団四季で、演出部、文芸部、演技部、つまりスタッフ、技術者、俳優たちが構成する集団だ。後者に属しているのは、きまった給料で仕事をする会社員ではなく、一人一人が独立した芸術家であり、彼らを結んでいるのは正劇団員会という組織である。

正劇団員会の議長は、四季創立以来の装置家、金森馨だ。

劇団・四季は昭和二十八年の結成以来、一度も分裂したことがないという歴史を持つ。離合集散の繰り返される演劇界にあっては、安定したグループということができるが、だからといって、演劇という職業に従事する人々が、公務員や大企業に働く人々と同じように、安定した

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生活を保証されているわけではない。彼らは、四季の演劇活動に常に参加してはいても、本質的にはフリー・ランサーであり、身辺には、時に寒い風が吹いたりする。

その寒い風から身を守ろうと、このグループには一種独特の互助のシステムが生まれた。医務委員会という制度も、そのうちのひとつである。

医務委員会は、いうまでもなく団員の健康管理、病気や怪我の治療、療養に活躍するが、四季の演劇人たちは、たとえば、仲間が恋愛問題で、トラブルに陥ったりした時も、互助の精神を発揮する。彼らが、時には互いのプライバシーにまで踏み込んで面倒をみてしまう、という背景には、かつて、芝居では食えなかったころに培われた、一種の同志意識がある。

二十五周年記念誌には、こんな聞き書きも記録されている。

二十八年の第一回公演「アルデール又は聖女」(ジャン・アヌイ作)は、浅利慶太、吉井澄雄、藤本久徳、日下武史、水島弘、井関一、藤田三夫、藤野節子、杉山紀子、浜本三保子の十人を中心とするメンバーが、一人千円ずつを出し合って公演のための基金とした。

「ひとり千円ずつだったけど、おれ、金がなかったから出せなかったんだ。そのぶん、藤野さんが二千円出してくれたんじゃなかったかなあ」

「毎日、ある小学生にフランス語を教えていてね。一日百円で一月三千円。電車賃に毎日二十円ずつかかって、手取りが月に二千四百円。この中から毎月二千円ずつ本を買って、読みに読

んだ」
「一日百円の予算で生活してたんだけど、コッペパンが十円、ラーメンが三十五円、新宿に五十円で天丼を食わせる店があったが、それ食うと帰りの電車賃がなくなっちゃうんで、食ったときはしかたがないから歩いて帰った」
「ある日カケソバが二十円から三十円に値上げされちゃってね。帰りのお金がなくなっちゃったから、日下と二人で、沼袋から上井草まで（西武新宿線で六駅間）歩いてしまった」
「大学の奨学金が月二千円だった。支給日がくるたびに、ああ、もうひと月、芝居ができるぞ、うれしいなあ、と思ったね」
「藤野さんのギャラ、井関（当時、某香料会社の経理を担当していた）の月給、水島の奨学金、持ってるヤツのをみんなで使う。それが当り前だったね」
企業が従業員の健康に関心を持つのは、労務管理として当然のことだが、四季には労務管理とも違う独特の互助の制度が、こうした苦境時代の記録を背景に、できていたのだった。
医務委員会の委員は、四季株式会社社長の浅利慶太と、劇団四季所属の俳優、立岡晃の二人である。浅利の叔父・田辺元三郎は東京田辺製薬の社長。演劇で食えなかったころ、浅利はこの会社で働いていたことがあるから、医事・薬事の知識がほんの多少だがあった。立岡の方は京都の歯科医の息子。東京歯科大予科三年で中退という経歴を持つ。この二人が中心となって、

劇団員の健康管理、病院、医師の紹介などをやっていた。

医務委員制度ができたのは、記念誌にもあるように、俳優・石橋岳美の白血病が契機だった。この時、団員たちは若い石橋のために全員こぞって献血をし、バックアップしたのだが、石橋は間もなく死に、あとにガンの恐しさという衝撃だけが残った。

コッペパンやカケソバを食って、演劇論に熱中した創立メンバーたちも、すでに四十代に入っている。フリー・ランサーの身辺に吹く風の寒さに、今や、ガンの恐怖も加わったのだ。そういう寒さと恐怖に対する相互自衛策として、制度が発足した。

委員を二人だけにしたのは、病気によってはことがプライバシーに関わるものもあり、そうした私的な秘密を守るためだ。特にガンについてはそのような配慮が要求された。

Mという幹部俳優が、

「どうも変なセキが出る」

と相談にきたことがある。医者の診察を受けたところ、

「きわめて早期のガンという疑いが五〇パーセントほどある」

という。本人には気管支炎から肺炎になりかけている、と知らされた。

だが、本人はガンと察したらしく、肺炎になりかけているといわれたのに、子供と一緒にスキーに出かけたりする。せめて残り少ない命を、と思いつめたのだろう。

この時、劇団は数ヵ月先までのキャストを発表した。中には、Mの名前も入っている。
「浅利は、医師からくわしい話を聞いている。ガンと知ったら、先のキャストに加えたりしないはずだ。加えたところを見ると……」
そんなふうに信じ込ませようという、手の込んだ嘘である。
がんセンターで検査の手はずを整えたが、本人にそれを通知したのは検査の前日。その結果、ガンの疑いは晴れ、結核とわかった。
〝無実〟で終ったけれども、この時も、ガンの恐怖は浅利と立岡の胸を冷え冷えとひたした。
二人は、Mが結核とわかったあと、
「この話は秘密にしよう。みんなに知られたら、これから先、また嘘をつかねばならないという時に、もう同じ手口ではだませなくなるからな」
と話し合っている。
あとの話になるのだが、浅利はこのことをのちに後悔した。
むしろ、全員に知らせた方がよかったのではないか。Mにガンの疑いがかけられたと知れば、全員が緊張し、もはや身近になったガンに対して、自衛の必要性をはっきりわかってもらえたのではないか。浅利はそう考えたのだ。
〝薬屋〟の叔父を持つ演出家と、歯医者になりそこなった俳優からなる医務委員会は、その後

も何度も活躍している。俳優、井関一が、公演先の鹿児島県伊集院で声が出なくなったが、近くに咽喉専門の医師が見つからない。直ちに医務委員が出動して医師を探し、治療の手はずを整える。この種のことは日常的に起った。

医務委員会は集団検診も実施したが、全員揃って、デスク・ワークをしている職場と違ってこれはなかなか実績が上がらず、四十歳以上の団員には、四季と関係のある病院、医師のところでそれぞれ定期検診を受けるように、とすすめた。

五十四年一月現在の「ドック入り勧告リスト」というのがある。四十歳以上の対象者をリストアップして人間ドック入りをすすめたもので、そのなかで、四十九年七月二十四日にドック入りしたきり、以後一度も検診を受けていない金森馨の名前には、二重丸がつけられていた。

彼は、まぶしがり屋というのか、目が弱い。人間ドックで眼底検査をやった時、目に強い光を当てられたのをひどく嫌がり、

「二度とご免だ」

と以後、ドック入りを拒み続けていたのである。

おかゆが食べたい

五十四年八月、美弥子の母親、野副やす子（54歳＝同）の記憶によれば、それはひどく暑い日だった。東京・阿佐谷に住むやす子は、その日、渋谷区初台の金森の家を訪ねた。

美弥子がいう。

「金森の具合がちょっとおかしいのよ」

「おかしいって、どんな？」

「ゲップが出て止まらないの、一日中。ひどいときは何日も続くのよ」

「馨さん、相変わらず夜遅いんでしょう？」

「そう、十時前には帰ったことないわ」

「胃でもこわしたんじゃないの。健胃散をのませてあげたら……」

昭和ひとけた世代の多くの男たちがそうだったように、金森はこの三十年近く、激しく働き続けた。舞台美術の仕事は、演出家との打ち合わせからはじまって、何枚もスケッチを起こし、最終的にひとつにしぼり込んで模型を作る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com